



Title	20世紀中国東北地域史と個人史：張作霖・張学良をめぐる政治家群像
Author(s)	西村，成雄
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1991, 1, p. 3-31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99635
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

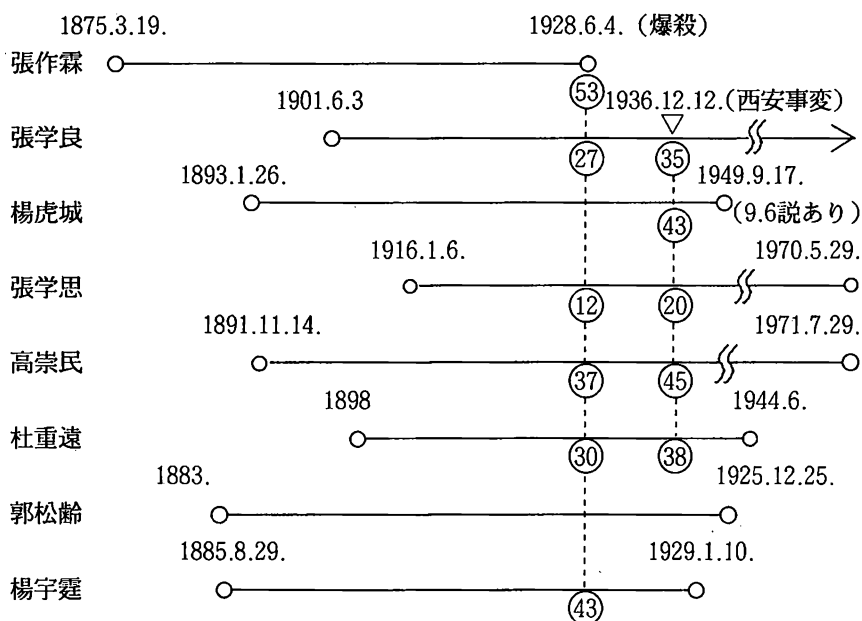
20 世紀中国東北地域史と個人史

—— 張作霖・張学良をめぐる政治家群像 ——

西 村 成 雄

ここでとりあげた8人は、20世紀中国の東北地域史にかかわった政治家たちである。彼らは単に東北地域史のみならず、20世紀中国政治史上にも重要な役割を果たすと評しうる人物でもある。それぞれ8人の略伝を通して、20世紀前半期における個人史と中国政治がどのように交錯しあっていたか、また、歴史における個人の役割をどのように評価しうるのかについての、ひとつの試論でもある。

昨年（1990年）6月1日、90歳誕生祝賀会に、54年ぶりに公式出席をとげた張学良氏を含めて8人の一覧を以下に付し、この略伝の序としたい。



張作霖 Zhang Zuolin (1875.3.19～1928.6.4)

字、雨亭。1875年3月19日（光緒元年2月12日）奉天（現遼寧）の海城に生まれ（三男）、父は張永貴、母は邵氏。14歳に父が殺されたので、母と鎮安県（現在、黒山県）に移住。緑林から身を起し、奉天・吉林・黒龍江を支配、1922年からは関内に進駐し北京政府の掌握をめざした、奉天系軍閥の創始者。1928年6月、北京から奉天に帰る途中、関東軍により爆殺された。子供は8男6女をもうけた。彼の個人史は、四期に区分できる。

第一期（～36歳）は、奉天前路巡防營統領として、総督趙爾巽の命を受けて辛亥革命の波及を奉天で阻止するまで。1894年、日清戦争時に毅軍馬玉昆の部隊に入り、終戦後は、馬賊（胡匪、紅鬃子）の馮麟閣の部下となるが、義和団運動とその後のロシア軍の東三省進駐に対する私的防衛組織「保険隊」を率い、近隣の頭目、張景恵や湯玉麟、張作相らと共同行動をとった。1901年9月、盛京將軍増祺の保険隊に対する招撫政策を受けて、張作霖は遊撃馬隊の長となり、1904年からは政府から経費を支給され、官軍となった。日露戦争中には当時の田中義一中佐に救われたことがあり、日本軍側に協力したといわれる。1907年、徐世昌が初代総督に任命され、胡匪鎮圧政策が実施されると、張作霖はこれに功を立て、奉天巡防營前路統領となった。その後も「蒙匪討伐」に名を馳せ、部下3500名を擁するにいたった。

第二期（36～43歳）は、北京政府より1918年9月東三省巡閱使に任じられるまで。張作霖の部隊は洮南に駐留していたが、1911年11月12日、総督趙爾巽の要請で諮議局に乗りこみ革命派を武力威嚇し、その後、奉天に駐留、革命派の指導者張榕などを暗殺し、1912年6月には省城の軍権を掌握した。9月袁世凱は、張作霖の部隊を陸軍第二十七師と改編し、かれを中將師長に任じ、湯玉麟、張景恵、張作相、孫烈臣らを廃止、奉天省城駐防となった。以後、袁世凱との関係を強化し、15年、袁の帝制準備でも新任の袁世凱派段芝貴督軍とともに、支持を表明するが、全国的に反袁闘争が展開するのをみて、16年4月、「奉天人、奉天を治む」というスローガンで段芝貴を放逐。6月、袁の死後、段祺瑞政府は奉天督軍兼省長に任じられた。奉天督軍となった張作霖は、配下に文人や日本陸軍士官学校出身者

を集めるようになり、遼陽の士紳袁金凱を秘書長に、楊宇霆を軍参謀長に、王永江を奉天警務処長に任じた。こうして、旧来からの緑林の兄弟グループと、新しいグループを擁したひとつの政治的集団としての奉系軍閥が形成された。1917年7月、張勳の復辟が失敗したのを機に、張勳側についた緑林以来のライバル馮德麟を打倒し、奉天の軍権を完全に掌握、8月黒江龍省督軍を自己の影響下に置いた。18年はじめ、段祺瑞の腹心徐樹錚は、楊宇霆を通して張作霖を安徽派に引きこみ、奉軍5万を入関させ直隸派への牽制としたが、張作霖は、同年9月、東三省巡閱使（清朝期の東三省総督に相当）の地位を得た。東北全域をその支配下に置く基盤ができあがった。これから、10年、張作霖は東北を地盤に北京政府を争奪することになる。

第三期（43～50歳）は、1925年12月の郭松齡の反奉クーデタに勝利するまで。張作霖と日本との関係は、1916年10月、寺内正毅内閣以降積極的に張作霖支持をうちだし、18年にかけて朝鮮銀行は多額の借款をおこなった。経済関係も緊密化し、1919年から20年の大連輸出大豆の80％は日本と朝鮮向けであった。1920年には、張作霖は日本人顧問菊地武夫、町野武馬、本庄繁などを招請していた。1919年7月に勃発した「寛城子事件」は、日本軍と吉林軍の衝突であったが、日本側の強硬な対応で、北京政府は事実上の吉林督軍孟恩遠の革職をおこない、その結果、張作霖は吉林を支配下にくみ入れた。こうして東北に覇をとなえた張作霖は、中央政治に積極的に関与することとなる。1920年7月、安直戦争で直隸派曹錕とともに段祺瑞を打倒、北京政府の実権を握り、同時に日本の強力な援助を要請していた。21年5月、張は蒙疆経略使となり、熱河、察哈爾、綏遠の三特区をも支配下に置いた。その後、直隸派曹錕との矛盾が激化し、22年4月第一次奉直戦争となったが、敗北、5月東北の独立を宣言し、6月には東三省保安総司令に就任、東北自治と称し、北京政府との関係を絶った。これには王永江の献策があったという。王永江は7月奉天省長となった。この第一次奉直戦を経て、張作霖の戦後経営ともいうべき東北自治政策には、軍隊の再編成（東三省陸軍整理処）、兵工廠の拡充、交通網の整備（東北交通委員会）、税収確保、鉄道収入独占、塩税扣留（北京へ送らない）などがあり、いずれもその直接的目的は北京政府争奪のための軍事力・経済力の増強にあった。23年前後には、反直隸派「三角連盟」を推

進し、かつての敵段祺瑞および孫中山との連合をとらえた。孫中山も北方軍閥の分化をねらって汪精衛を奉天に派遣した。24年9月、第二次奉直戦争では、長城沿線を戦場とし長期戦化した。馮玉祥のクーデタ（北京政変）により、11月、張作霖と馮玉祥は北京政府を掌握した。同じ頃、孫中山が北上し国民会議を提唱するが、張作霖はこれに対抗して善後会議を開催した。25年前半期、奉天軍は大量入関し、直隸（李景林）、山東（張宗昌）、江蘇（楊宇霆）、安徽（姜登選）を占領、6月には上海へ進駐した。そして五・三〇運動を鎮圧するが、各地の反奉運動の高揚を招き、さらに10月直隸派孫伝芳の反奉五省連軍の結成や、北方での馮玉祥との対立のなかで、11月南方から撤退するにいたった。関内に40万の軍隊を投入していたが、これを支える東三省民衆の負担は想像を超えるものがあった。その最大の手段は奉天票の濫発にあった。1925年11月22日、馮玉祥国民軍への対応をめぐる張作霖と意見が対立していた郭松齢は、「地盤を争奪しあい、東北人民に損害を与える」戦争の停止と、東北の経済の安定と開発を主張して、反張作霖、反楊宇霆の軍を挙げた。郭軍が12月5日、錦州を占領した時点では、張作霖はもはや敗北と観念して、6日「下野声明」すら出していた。ところが、その時、日本側は関東軍名で満鉄線内の作戦を禁止する警告を発し、事実上、郭軍の東進を阻止、その間に兵を整えた張作霖と楊宇霆によって郭軍は12月24日敗北させられた。危ういところで張作霖は、日本軍介入によってその政治生命を維持することができた。

第四期（51～53歳）は、日本軍の援助下に、郭松齢のクーデタを鎮圧してより、関東軍によって命を絶たれる28年6月までの約2年半。26年1月、張作霖は、奉天省長王永江の軍事費削減のための財政改革意見を斥け、楊宇霆とともにさらに北京政府掌握をめざす政治的選択を行なった。26年3月以降、馮玉祥を西北に駆逐した。増大する軍事費の負担は、奉天票の濫発にによって補われ、その結果としての対金票（「朝鮮銀行兌換券」）交換レートは下落し金融市場は混乱し、民衆のインフレに対する不満は高まったが、権力的財源確保のためにさらに大豆特産物の買い占めに乗りだしていった。時あたかも、広州国民政府は26年7月反軍閥闘争を組織し、北伐軍は直隸派呉佩孚らの勢力を打倒し急速に長江流域に進出した。これに対し、張作霖は、26年12月安国軍総司令となり、27年4月12日の蔣介

石反共クーデタと事実上呼応しつつ、北京で中国共産党北方区執行委員会を強制捜査し、4月28日には責任者であった李大釗を処刑し、6月には「安国軍政府」を樹立して「中華民國陸海軍大元帥」の地位に就いた。ちょうどこの頃、日本政府田中義一内閣は東方会議を開催、8月に入ると、奉天総領事吉田茂は、奉天省長の莫德恵に吉（林）会（寧）線など7路線の増修築を要求、他方、公使芳沢謙吉は「商租権」問題などを含む「満蒙懸案の一挙解決」を張作霖に要求した。張作霖が北京政権を掌握したのを機に、「満蒙交渉」の展開をはかったといえよう。東北各地では8月から9月にかけて、こうした日本側の政治的攻勢に反対する反日運動が組織された。さらに、10月満鉄総裁山本条太郎は、張作霖との間に「満蒙新五路協約」を結んだ（正式には翌28年5月に調印）。28年4月、蒋介石、馮玉祥、閻錫山、李宗仁の四集團軍は対張作霖「北伐」を実施、日本は第二次山東出兵をおこなったが、5月18日、公使芳沢謙吉は張作霖の関外退去を勧告した。5月30日、張作霖は張作相、孫伝芳、楊宇霆らとの会議で退去を決定。6月3日早朝北京をたち、天津を経由して、4日午前5時半頃、京奉線皇姑屯駅をすぎた満鉄線と立体交差する地点で、張作霖の列車は、関東軍河本大作大佐指揮下の関東軍の満鉄線橋梁爆破によって破壊炎上させられ、重傷を負い、一旦、大元帥府に収容されたが、その日の午前9時半頃に死亡した。かれの死は、張学良の帰奉した後の6月21日公表された。

張作霖の歴史的評価については、その対日従属性を強調するものと、むしろ東北に対する日本帝国主義の併合政策にそれぞれの局面で抵抗した側面を強調する議論がある。いずれも張作霖の一面をとらえているが、おそらくかれの張一族による東北支配への願望と、中華民族の国家としての北京中央政権掌握への願望という二つのアイデンティティの交錯がそうした二面性を生みだしたものと考えられる。

〔参考文献〕

1. Gavan McCormack, *Chang Tso-lin in Northeast China 1911-1928. China, Japan, and the Manchurian Idea*, Stanford University Press, 1977.
2. 常城主編『張作霖』、遼寧人民出版社、1980年。

3. 司馬桑敦等著『張老師與張少帥』、伝記文学出版社、1984年。
4. 王鉄漢『東北軍事史略』、伝記文学出版社、1982年（修訂版）。
5. 張徳良・周毅主編『東北軍史』、遼寧大学出版社、1987年。
6. 林正和「張作霖軍閥の形成過程と日本の対応」『日本外交史研究（外交と世論）』（国際政治第41号）、日本国際政治学会、1970年。
7. 西村成雄『中国近代東北地域研究』第3章第1節、法律文化社、1984年。

張学良 Zhang Xueliang (1901. 6. 3～現在)

字、漢卿。号、毅庵。幼名、小六子。遼寧省台安県桑子林詹家窩鋪生まれ。張作霖の長男。兄弟は八人、姉妹は六人。父張作霖の死後、東北地域社会を代表する民族主義的軍人・政治家。1915年（15歳）父母の命で于鳳至と結婚、三男（閻珣、閻珣、閻珣）一女（閻瑛）、のち趙媿（一荻、綺霞）との間に一男（閻琳）あり。1964年7月、趙一荻と正式に結婚。

張学良は、楊虎城とともに1936年12月12日の蒋介石に対する「兵諫」事件（西安事件）によって世界をゆるがした人物であり、中国近代政治史上のいくつかの重要な転換点に位置し大きな役割を果たした。彼の個人史はほぼ五期に区分しうる。

第一期（～27歳）は1928年7月の「東北保安総司令」就任まで。1916年頃奉天（瀋陽）のキリスト教青年会（YMCA）活動に参加し、アメリカ人幹事のPlattらと交流、後日、彼のブレインの一人となる閻宝航らと相識るようになった。もちろん、この間、伝統的学問を白永貞（佩珩）らから受講していた。19年3月東三省講武堂第一期砲兵科に入学、教官には郭松齡、熙洽らがあり、翌年3月卒業後、すぐ巡閱使署衛隊旅長となり、郭松齡を参謀長とした。その後、21年5月には衛隊旅を第三混成旅と改編し旅長となり、同年秋、父命により日本の秋季軍事演習を参観するが、日本側の挑戦的デモンストレーションに「反日」的意識を芽生えさせたという。第一次直奉戦争（1922年4月）では東路軍第二梯司令として参戦、第二次直奉戦争（1924年9月）では第三軍軍長として参戦し勝利を得た。25年6月には上海に進駐。同年11月、郭松齡の反張作霖クーデタでは鎮圧側にまわらざるをえず、郭の死を嘆いた。26年末、張作霖は北京で安国軍総司令となり、

28年6月退出までの1年半北京政府を支配した。まさにこの時期、広東からの国民革命北伐軍が北上し、27年4・12クーデタをはさんで、蒋介石らの「第二次北伐軍」は6月北京に入城。張作霖の退出後、河北での退却指揮をとっていた張学良は、6月4日の日本軍による張作霖爆殺（皇始屯事件）後、奉天に帰り、6月18日奉天督弁に就任、7月1日には東北保安総司令となった。

第二期（27～29歳）は1930年9月の「中原大戦」参戦まで。まず、28年12月29日、「易幟」を実現し、南方国民政府との政治的合流を果たすが、これは、日本の東北地域への政治的経済的攻勢に対抗（民族的独立へのかれのアイデンティティを実現）するには、国家的レベルで統一（国家統一へのかれのアイデンティティ）していなければならないとする「反日・民族主義」から出たものであった。このイニシアティブ掌握のために、29年1月10日の楊宇霆・常蔭槐暗殺事件があった。さらに、同年7月の「中東路回収事件」での「反ソビエト・民族主義」も、東北地域の国際的諸条件のもとで中国の民族的国家的独立の課題をどのように実現すべきかという認識に支えられたものであった。中ソ間の戦争状態はソビエト軍優位のままに同年12月、暫定的に「ハバロフスク議定書」によって終結したが、交渉はその後にも継続され、「満州事変」で中断状態となった。張学良のこうした対日、対ソ認識とその行動は、中国ナショナリズムの一環を構成しており、単なるかれ個人の意図から生じたのではなく、1920年代を生じて蓄積されてきた東北地域経済の資本主義発展と、それを基盤とした地域政治の民族主義的再編成過程に起因するものでもあった。とくに、金融政策面で、奉天票のインフレーションを銀兌換券「現大洋票」の発行（1929年5月）によって終結させたことや、民族主義的社会団体（たとえば遼寧省国民外交協会）の活動などが、張学良政権の三年（1928～31）を支えていたとみるべきだろう。次の第三期をも含めて、張学良のナショナリズムを支えた東北地域の民族的資本主義発展を軽視すべきではない。

第三期（30～34歳）は1935年秋、「西北剿匪総司令部副司令」として西安に移るまで。この時期は、かれの三つの大きな政治選択がなされた。まず第一に、1930年9月、「中原大戦」で蒋介石側に立ち国民政府による国家的統一を促進し、10月には陸海空軍副司令に就任、中央政治の舞台に登場し、北平に副司令行営を開設、東北地域から東北軍部隊を駐留させた。「中原大戦」への武装調停の電報

を発したのが9月18日で、ちょうどその1年後に勃発した「満州事変」の日付との象徴的符合がいわれている。第二に、「満州事変」での「不抵抗主義」の選択に典型的に示されたように、かれの中華民国＝国民政府への国家的アイデンティティが、自己の支配領域喪失に対する直接的抵抗（＝抗日）としての民族的アイデンティティを凌駕し、国民政府＝蒋介石への依存を強めた。もちろん、かれ個人の民族的アイデンティティが消失していたわけではなく、東北義勇軍への援助などがなされていた。1933年3月、蒋介石によって「熱河失守」の責任をとらされて下野した時ですらなお「健全なる政府のみが外侮を禦しうる」と述べていたことは、「中原大戦」以来のかれの中心的アイデンティティがどこにあったかを示している。下野後、かれは于鳳至や趙一荻らとともにヨーロッパに外遊し、とくにイタリアでのファシズム運動に触れるなかで強力な指導者への礼賛と服従を強調することになる。これは、かれ自身がすでに内面化していた国家的アイデンティティを極限にまで増幅させたものであり、その延長上に、第三の政治選択としての「鄂豫皖剿匪司令部副総司令」就任があり、蒋介石の「安内攘外政策」推進を担うことになる。しかし、この安内攘外政策こそ、張学良と東北軍および閩内に流亡した東北知識人にとって、自らの民族独立、東三省失地回復という民族的アイデンティティを目覚めさせ、さらには聯共抗日政策の提起を生み出す役割を果たしたのである。注目すべきは、「満州事変」以後、閩内に流亡した民族主義的東北地域政治の担い手たち、閻宝航、高崇民、王化一、盧広積らによる「抗日復土運動」は、満州事変直後の「東北民衆抗日救国会」を経て、「復東会」（1933. 9. 18）の組織化がなされたことである。張学良の外遊後、これは蒋介石の圧力で解散させられたが、高崇民や上海滞在の杜重遠らの、かれと東北軍に対する抗日のための働きかけは重要な契機となっていた。1935年にかけての長江流域都市ベルトは、抗日救亡運動の波にあらわれ、すでにひとつのうねりを形成しつつあった。張学良や東北軍もこの影響から免れることはできなかった。

第四期（34～35歳）は、西安事件を経た1937年春までの時期。蒋介石の「安内攘外政策」にもとづく中国共産党支配地区への包囲攻撃（囲剿）のいわば先頭に立たされた張学良と東北軍約13万人は、第五次囲剿の結果、「長征」に出た紅軍を追って、1935年秋、西安地域に北上、新たな囲剿作戦に動員された。張学良は

「西北剿匪総司令部副総司令」に就任し、南京での国民党第五次全国代表大会に出席中、東北軍は、35年10月から11月にかけて3回にわたる紅軍との戦闘で敗北を喫し、加えて南京中央からは敗北した東北軍の建制番号撤廃を通告された。杜重遠が張学良に「蒋介石は共産党も東北軍も消滅させようとしている」と警告していたことが現実となったのである。時あたかも、日本の華北侵略に抵抗する35年12月9日の北平における抗日救亡学生運動は、自ら校長を務める東北大学の学生をも含んで、大規模な民衆運動へと発展し、上海、南京、武漢をはじめとする長江都市ベルトの抗日救亡運動と呼応しはじめ、黄河沿いの都市西安にも直接的影響を生みだしつつあった。閩内流亡知識人のグループ、高崇民や閻宝航らの「内戦不参加、聯共抗日」論はしだいに張学良周辺にまで影響力を及ぼし始めていた。張学良も、上海ルートから独自に中国共産党との接触を試みようとしていた。1936年4月9日、張学良は極秘に膚施（延安）で周恩来と会談し、日本軍部は中国国内の政治闘争である「倒蔣」や「安内＝剿匪」が完成するのを待ってくれはしない、と強調したとされる。あきらかに、張学良の民族的アイデンティティは、抗日という課題に照応した中国政治体制の再編成を要求していた。つまり、民族的アイデンティティ実現のためには「聯共」も必要とする立場への傾斜がみられ、従来のかれの国家的アイデンティティの再検討がなされていたのである。36年6月22日、かれは「中国の活路は抗日のみにある」と題する講演で「抗戦こそ中華民族の唯一の活路であり、抗日は東北軍最大の使命である」と断言した。上海にはすでに「全国各界救国聯合会」が結成されていた。9月23日、蒋介石宛電報で「抗日の声は全国に漲っている」と述べるほどであった。蒋介石はこれに対し徹底した剿匪第一主義の政策を主張し、11月23日「抗日救国七君子」を逮捕した。張学良はその釈放を求めたが容れられず、ついに、12月10日、楊虎城と「兵諫」の実行を決意、12月12日、華清池の蒋介石を拘束、西安の新城大樓に送った。蒋介石が剿匪を一義的に主張する限り、かれが代表する国民政府は改組されねばならない。全国に宛てた「対時局宣言八項目主張」の第一は「南京政府の改組」であり、抗日党派の主張を組み込むことを主張した。張学良自身は、蒋介石個人に反対しているのではなく、抗日の先頭に立つ限り擁護するし服従すべきであると考えていた。12月24日、蒋介石から抗日政策実行の言質をとり、25日、蔣

介石、宋美齡とともに洛陽に飛んだ。この決定は中国共産党代表の周恩来には伝えられなかった。張学良の兵諫の論理はあくまでも「指導者への諫言」にあった。かれが指導者個人への依存とそれへのアイデンティティを保持していたかぎり、ひとたび蒋介石とともに一人で南京に赴けば、今度は逆に、蒋介石によって政治的監禁を受けることは不可避であった。36年12月31日、国民党軍事委員会高等軍法会審は「上官暴行強迫罪」により「懲役十年、公民権剥奪五年」の判決を下した。

第五期（35歳～現在）は、1937年1月4日付けで原判決が「特赦」され、軍事委員会のもとで「嚴加管束」する処置がなされたが、以来1990年まで基本的にはこの状態が継続されてきた時期。この間、37年1月奉化県溪口へ、11月には安徽黄山へ、38年1月湖南郴州蘇仙嶺へ、3月同じく湖南沅陵鳳凰山へ移り、40年2月、趙一荻が鳳凰山にきて以後は同一行動をとることになる。于鳳至はアメリカへ移住。40年10月、貴州修文県陽明洞へ、42年2月貴州開陽県劉育郷へ、44年初冬に貴州桐梓県南門外天門洞へ、46年4月9日、貴陽で蒋介石・蔣経国と会見、同年11月2日、いったん重慶に移されたあとすぐ台湾台北へ。1954年5月下旬、蒋介石と会見し、その後20万字の『自我檢討報告』を書いたとされるが、その一部が1964年7月「西安事変懺悔録」として公表され流布している（『張学良評伝』pp. 320～321）。1955年キリスト教に入信。1956年12月12日の西安事変記念会で周恩来は張学良を「千古功臣」と評価した。59年、蒋介石は張学良に対する「管束」を解除した、といわれている（『張学良將軍伝略』p. 600）。64年7月4日、趙一荻と正式に結婚。75年4月、蒋介石の葬儀に参加。79年10月10日、国慶大会に参加。80年10月、金門島を訪問。88年1月、蔣経国の葬儀に参加。90年6月、90歳誕生祝賀会に出席。

このように張学良の個人史を五期にわけてみると、西安事件にいたるまでの27歳（1928年）から35歳（1936年）というわずか八年に濃縮された政治活動が、いかに中国近代史上重要な役割を果たしていたかをみることができる。そして、張学良の果たした最大の歴史的役割は、西安事件を通じて、かれの民族的アイデンティティの実現をめざしたことが、中国政治の中心的課題（抗日救亡）であることを典型的に全国民の前に示した点にあった。中国近代政治史における大転換期ともいうべき抗日民族統一戦線形成への転轍手であったといっていよう。

〔参考文献〕

1. 中国第二歴史檔案館・雲南省、陝西省檔案館合編『西安事変檔案史料選編』、檔案出版社、1986年。
2. 中国現代革命史資料叢刊『西安事変資料』第一輯、第二輯、人民出版社、1981年。
3. 中国人民政治協商会議遼寧省委員会・文史資料研究委員会編『張学良將軍資料選』（遼寧文史資料、第十八輯）、遼寧人民出版社、1986年。
4. 応徳田『張学良和西安事変』、中華書局、1980年。
5. 方正・愈興茂・紀紅民編『張学良和東北軍』、中国文史出版社、1986年。
6. 張徳良・周毅主編『東北軍史』、遼寧大学出版社、1987年。
7. 司馬桑敦（王光逖）『張学良評伝』、星輝圖書公司、1986年。
8. 武育文・王維遠・楊玉芝『張学良將軍伝略』、遼寧大学出版社、1987年。
9. 傅虹霖（王海晨・胥波訳）『張学良的政治生涯一位民族英雄的悲劇』、遼寧大学出版社、1988年。
10. 外務省記録・S 1615-27、『西安事件』（上）（下）
11. 西村成雄「張学良の政治的肖像」『現代中国』第63号、1989年。

楊虎城 Yang Hucheng (1893. 11. 26～1949. 9. 17、9月6日説あり)

幼名、長久（久娃ともいう）。辛亥革命後、忠祥と改名、その後「忠」と同音の懿に改名、虎臣（その後、臣を城と改む）と号した。これを1917年から29年まで使用。29年以後、虎城と称す。陝西省蒲城縣東南郷甘北村に生まれ、父は楊懷福、母は孫一蓮、弟は楊茂三。

楊虎城は、張学良と並称されて、西安事件の当事者として著名であるが、張学良と同じく1937年12月以降、蒋介石によって事実上の監禁状態におかれ、12年後の1949年9月17日（周養浩によれば9月6日）重慶の中米特殊技術合作所で殺害された。楊虎城は、陝西省という地域社会から軍人として出発し、1936年の中央政

治の転轍に大きな役割を果たした人物であるが、いま、彼の個人史を三期にわけて概観してみよう。

第一期（～35歳）は北伐戦争に参加後、1928年4月末日本に渡り同年11月に帰国するまで。貧困な農民の家庭に生まれた楊虎城は、13歳で童工に出るが、1908年5月父が誣告によって西安で処刑されてから農民の相互扶助団体「中秋会」を組織し、1911年10月22日の陝西反清起義に参加、その後も自らの部隊を率いて農民を抑圧する悪霸を打倒したり、1915年の反袁世凱闘争勝利後、16年には陝西陸軍第三混成団王飛虎部の第一営長となった。1917年、孫中山の護法闘争に呼応した陝西の于右任らの靖国軍に参加、21年、安直戦後の直隸派呉佩孚らの勢力にも対抗し、22年以降榆林に勢力を温存、24年には国民党第一次全国代表大会に姚丹峰を派遣、国民党に入党。24年10月、馮玉祥らが曹錕を打倒して国民軍が組織されるが、楊虎城は国民軍の一翼として陝北榆林から南下、三原県に駐留した。この間、中国共産党員魏野畴らとの交流があり、25年7月に創設した「三原軍官学校」にも黄埔軍官学校卒業生の中共党員を吸収し、魏野畴を政治部主任にした。26年4月16日、楊虎城は三原から西安に進駐し、直隸、奉天派軍閥勢力と対峙したが、西安は重囲のなかで11月28日までの8ヵ月間よくもちこたえ、広東国民政府の北伐軍の北上に呼応する形勢となった。とくに、26年9月、馮玉祥や于右任がソビエトから帰国し綏遠省五原県で国民軍聯軍を組織して南下し、11月末西安の重囲を解くことに成功する。楊虎城は、27年5月、国民軍聯軍東路軍前敵総指揮として、直（隸）魯（山東）聯軍と河南地域で闘うが利あらず、秋には安徽省太和に退き部隊の整頓をおこなった。この時、部隊には魏野畴や南漢宸ら中共党員が活動し、同年4月から7月にかけての蒋介石、汪精衛、馮玉祥らによる反共クーデタの波及を阻止し、秋からは武装暴動方針の推進をはかっていた。楊虎城は、当時、魏野畴との関係で、入党を申請したが河南省委は承認しなかったという。28年2月、かれは、部隊を離れ南方上海へむかうが、4月上旬の中共皖北特委指導下の劉集暴動で魏野畴の死を聞くなかで、同月下旬、夫人の謝葆真と秘書の米暫沈の三人で日本へ渡航するにいたる。楊呼尘と改名し、神戸を経て東京の大岡山や東中野に居住し、代々木練兵場の訓練などを観察したり、留学生から日本の政情について理解を深めていた。

米暫沈の回想によれば、楊虎城は、当時の日本の民主主義の表面的形式性を認識したうえで、なおかつ中国ではこのような民主すらないことが動乱の重要な原因の一つだと考えていた。1928年秋、馮玉祥と蒋介石のそれぞれの側から帰国を要請され、さらに楊虎城部隊からも帰国要請が出るなかで、28年11月16日帰国した。

第二期（36～42歳）は、1935年末、南漢宸を介しての中共との合作問題が提起された時期まで。日本から帰国後、1929年、国民革命軍第二集团軍暫編第二十一師師長に就任、山東での軍務に就くが、同年9月の蒋介石・馮玉祥戦争では蔣側につき、30年5月中原大戦（蔣対閻錫山・馮玉祥）でも蔣側につき、同年10月十七路軍を率い西安に進駐、陝西省政府主席に任じられた。これより1933年にかけて楊虎城は陝西省の地方政治を運営する立場となる。陝西省主席としての約3年は、水利施設、医薬衛生事業、教育事業などに成果をあげたとされる。しかし、蒋介石との西北政治をめぐる矛盾は激化し、省政府秘書長南漢宸には逮捕命令が出され、蒋介石は楊虎城を省主席から解任、邵力子を派遣した。楊虎城が抗日のための中国共産党の活動を保護していたこともひとつの理由であった。かれの蒋介石への批判的立場が明瞭となっていった。紅軍との関係でも、1933年、紅軍第四方面軍が四川省北部に入ったとき、防衛戦はしたが密かに相互不可侵協定を結んでいた。35年5月の梅津・何応欽協定にもかかれは憤慨したという。1935年夏、東北軍が西北の困窮に動員されてより、楊虎城の十七路軍との摩擦が各処でおこったが、これは「雜牌軍」を相互に牽制させる蒋介石の手段でもあった。同年11月開催された国民党第五次全国代表大会で中央監察委員に選出されたが、蔣の消極的抗日論に同意できないともらしていた。ところが十七路軍と比較して装備の良いと思われた東北軍が、35年9月から11月にかけての紅軍との三戦役で大きな打撃を受けて、張學良もしだいに抗日のためには剿共戦を避けるべきだと考えるようになっていった。35年末頃、毛沢東は楊虎城宛に抗日民族統一戦線の提案を行ない、汪峰を派遣して楊と西安で協商させた。楊虎城も、天津にいた南漢宸の仲介で中共北方局の合作抗日6項目を受けて、共同抗日のための紅軍との相互不可侵協定と相互に代表を派遣するなどの事項を取り決めた。十七路軍（西北軍）は抗日という課題をめぐる、中国共産党を介して東北軍と同じ立場にあることを

表明しつつあったのである。

第三期（43～56歳）は、1936年の西安事件を経て、37年4月十七路軍総指揮を辞任、6月29日上海から「欧米考察軍事専員」の肩書きでアメリカ、ヨーロッパに赴き、11月26日香港に帰り、のち監禁され、1949年9月、殺害されるまでの時期。1936年に入り、中共側はさらに王炳南を西安に派遣し「抗日合作」協議をすすめた。他方、楊虎城は、張学良とすでに35年11月の国民党五全大会で抗日問題での意見を交換したあと、東北軍との合作を具体化するとともに、上海で面識のあった杜重遠や、南漢宸から紹介された張学良のブレイン高崇民らとも密接な関係をもった。36年6月、張学良と共同で王曲鎮に軍官の訓練団を組織し、東北軍と十七路軍の將校に対する抗日教育を実施した。ちょうど反蒋介石の両広事件が勃発した頃で、陳済棠、李宗仁らは張学良、楊虎城に内戦停止、一致抗日に呼応するよう密電していた。これに対し、楊虎城は密かに軍隊の動員体制をしき対応を準備していたが、両広派が早く瓦解したので具体化しなかった。36年の後半期は、全国的規模での抗日救亡運動が高揚するが、西安でも西北各界救国聯合会や東北民衆救亡会の運動が組織された。楊虎城、張学良は10月の魯迅追悼大会にも支持を表明、さらに11月28日の「西安防衛8ヵ月」の十周年記念大会では張学良、東北軍の参加を得て、事実上、救亡救国の西北大連合という形勢をつくりだした。そして12月9日の「一二・九運動」一周年の愛国請願運動でひとつのピークに達する。蒋介石は華清池に「剿匪督戦」に来て、抗日政策への転換を訴えた張学良を叱責するが、張学良と楊虎城は、12月10日、兵練を決定、十七路軍は西安市内重要拠点、東北軍は臨潼（華清池）をそれぞれ確保することとした。12日当日、十七路軍は西京招待所の国民党軍政大員を扣留した。午前9時ごろ、蒋介石は西安に送られてきた。張、楊はただちに全国にむけて抗日救国八項目を通電し、同時に延安に代表派遣を要請した。14日、抗日聯軍臨時西北軍事委員会が成立し、張学良が主任に、楊は副主任となり、「西北剿匪總司令部」は廃止された。17日、周恩来が中共代表団長として西安に到着。そして最終的には12月23日、24日にかけて、宋子文、張学良、楊虎城、周恩来、宋美齡らの談判で、蒋介石は基本的に内戦停止、共同抗日を受け入れることとなり、張学良は、25日、楊虎城や周恩來の同意を得ぬまま蒋介石に随伴して洛陽へ飛んだ。楊虎城は、南方に赴いた張学

良の立場を考えて27日、残されていた国民党軍政大員を釈放した。31日、張学良に対する軍法会審判決が出されるが、翌37年1月1日の元旦閲兵で楊虎城は反対を唱え、西安の民衆デモもこの判決に反対した。張学良のいなくなった東北軍内に分裂の傾向が生じ、東北軍、十七路軍、紅軍の三位一体体制が動揺するが、楊虎城は、結局それに対応できず、国民政府の策動のなかで4月の東北軍の陝西、甘粛からの撤退と、かれ自身が十七路軍総指揮辞任に追い込まれた。6月、「欧米考察軍事専員」として、日本を経由してサンフランシスコへ、この途中、盧溝橋事件が起こり日本軍の華化侵略全面化がすすむ。アメリカを8月4日出発し、その後、ロンドン、パリ、ベルリン、プラハ、ウィーン、ジュネーブとまわり、10月マドリードに赴き、フランコと闘う反ファシズム国際義勇軍を訪問し、『イスパニア青年に告ぐるの書』を発表、帰途、パリで『救国時報』の招宴を受け11月末香港に帰着。ところが、蒋介石との会見と称され南昌に赴かされた12月2日、軟禁され、1949年9月、中華人民共和国成立直前、重慶で夫人の謝葆真や子供の楊拯中とともに殺害されるまで12年間の監禁状態にあった。張学良は1946年11月という時点で台湾に移されていたため殺害を免れたというべきだろう。なお、異母兄に楊拯民がおり、すでに早くから延安で活動していた。

〔参考文献〕

1. 米暫沈『楊虎城伝』、陝西人民出版社、1979年。
2. 亢心栽・劉志強・張志強・李志剛・王惟之・王根僧『楊虎城將軍在歐美』（中国人民政治協商會議全國委員會文史資料研究委員會編）、文史資料出版社、1983年。
3. 郝郁文『楊虎城將軍歐州之行』、陝西人民出版社、1985年。
4. 中国人民政治協商會議陝西省文史資料研究委員會編『回憶楊虎城將軍』、陝西人民出版社、1986年。
5. 米暫沈（米鶴都整理）『楊虎城將軍伝』、中国文史出版社、1986年。

張学思 Zhang Xuesi (1916. 1.6～1970. 5. 29)

字、述卿。幼名、安兒。奉天大帥府で生まれる。生母は張作霖第四夫人許澍陽。張作霖の四男。1940年、謝雪萍と結婚。いわゆる軍閥の家庭に育ちながら、

中国共産党に入党し、軍人として抗日戦争を戦い、戦後、東北解放区創設にかかわり、49年以降は中国人民解放軍海軍創設者の一人として活動、1967年、文革で林彪グループ李作鵬派に監禁され、それがもとで1970年5月、54歳で病没。

張作霖を父とする8人の兄弟のうち、長男張学良とならんで軍人政治家として、しかも中国共産党員として、特異な役割を果たした人物である。張学思の個人史は次の五期に区分できる。

第一期（～20歳）は、1937年1月、国民党中央軍校卒業まで、生母許澍陽は、貧困な家庭に育ったこともあって張学思を「貴公子」扱いせず、1924年一般の奉天第四小学校に入学させた。父、張作霖が死亡後、28年10月末奉天同澤中学に入学、同学の王金鏡（王岳石）や、かれの紹介で家庭教師となった王西征（陶行知の曉莊師範出身）の影響で社会科学方面に関心をもちはじめた。1931年2月、北平の名門滙文中学3年生に編入したが、柳条湖事件後の抗日救亡救国運動に王金鏡とともに積極的に参加、東北民衆抗日救国会の閻宝航、高崇民、車向忱、盧広積らとも面識を得る。1933年初、中国共産党員王金鏡の紹介で「反帝大同盟」北平沙灘支部に参加、同年4月初、中国共産党員となり、廊坊の東北軍第六十七軍特務大隊で活動するが失敗し、組織関係を失う。その後、1934年、張学良の帰国後、滙文中学を卒業し、張学良の紹介で南京国民党中央軍校に入学、35年同校第十期第二総隊歩兵科生となるが、翌36年12月の西安事件に際して軍校当局に監禁された。張学良が南京にきた後、釈放され、1937年1月、中央軍校を卒業。かれの若い時期の原体験としては、まず第一に柳条湖事件における張学良と東北軍に対する北平での「不抵抗將軍」「誤国軍」という評価と、長兄張学良の苦衷を知るなかでも、なお抗日救国の正しさを確信しつづけていたこと、第二に、西安事件当時、中央軍校で「打倒張匪学良」というスローガンが出され、その弟という理由で監禁されたことと、長兄が「聯共抗日」にふみきったことへの共感が特徴的であった。張学思個人の抗日民族独立へのアイデンティティは一貫しており、張学良のような蒋介石あるいは他の指導者への傾倒がみられないのは、おそらく柳条湖事件後にその本格的な精神形成があったからだと思われる。

第二期（21～22歳）は1938年12月、延安のマルクス・レーニン学院に入学す

るまでの2年間。西安事件後、1937年2月末に保定の東北軍第五十三軍（万福麟軍長）に入るが、8月組織関係の切れていた中国共産党に再入党し、東北抗日救亡総会の党団書記劉瀾波のもとで「張学良釈放運動」をおこなうこととなった。これは周恩来の指導下にあった。張学思は、西安事変後分散された東北軍や東北政界の指導者たち、六十七軍長呉克仁、五十三軍長万福麟、五十一軍長于学忠、騎兵軍長何柱国、四十九軍長劉多荃、元奉天財政庁長王樹翰、元遼寧省長劉尚清、国民参政員・元奉天省長莫德惠らをたずね、釈放運動を展開した。しかしこの運動は、その後宋子文をも仲介に立てたが蒋介石によって拒否され失敗におわった。38年4月、香港へ赴き廖承志の援助のもとで、母許澍陽らのアメリカ移住をみおくり、10月、延安に入った。この間のかれの思想的転換と張学良釈放運動はあきらかに再入党したと密接に関連しあっており、周恩来の武漢における統一戦線活動の一環に位置づけられていた。

第三期（23～29歳）は、1945年8月以降東北へ移動するまで。1938年12月に入学したマルクス・レーニン学院を翌39年9月に卒業し、抗日軍政大学東北幹部隊（東幹部隊）の隊長（軍事教員に高崇民の子、高存信が就任）として、40年12月、晋察冀辺区の中軍区に配属され、聶榮臻の指揮下に入った。41年1月、冀中軍区参謀処処長、42年をつうじて、日本軍の「掃蕩作戦」に打撃を与え、43年4月、冀中軍区副参謀長になり、44年2月、晋察冀軍区平西分区参謀長として敵後抗日根拠地の確保にあたった。45年2月、平西分区副司令員兼参謀長となった。かれのこうした活動の起点となった1939年のマルクス・レーニン学院での生活のなかで、象徴的なできごととして、同室になったのが楊虎城の子供の楊拯民で、ある時、日本軍の飛行機による延安空襲の際、この二人と、徐海東（1935年11月陝北での対東北軍直羅鎮戦役の指導者の一人）が延河の防空壕に身をひそめあったが、徐海東がこれを称して「三位一体だ」と言ったという。これは西安事件当時の東北軍と西北軍、そして紅軍の統一戦線を指すが、1939年当時、延安には東北軍張学良の弟、西北軍楊虎城の子供が奇しくも同室していたのである。

第四期（29～33歳）は、東北地域へ進駐し、49年5月海軍創設へ移るまで。45年8月、延安総部朱徳総司令第二号命令によって、張学思ら元東北軍関係者

は、東北への進駐を開始した。中共中央委員の主要メンバー、陳雲、彭真、李富春、伍修権らも、東北地域の指導に派遣され、10万の軍と2万の幹部が投入された。張学思は、10月初、瀋陽到着後、中共東北局の任命により、遼寧省政府主席、省保安司令に就き、11月2日の遼寧省代表大会で遼寧省政府主席に選出された。かれは国民党に張学良・楊虎城の即時釈放と東北自治をよびかけた。11月末、国民党軍の進駐に対し瀋陽を自主撤退し、本溪に遼寧軍区を設け、その司令員となり46年1月改めて遼寧省民選政府の主席となった。当時、アメリカ軍に援助された国民党側の大規模な東北進駐がなされつつあったが、同年8月、ハルビンで東北各省市行政聯席會議を開催、東北共同施政綱領を採択、東北各省市行政聯合弁事処（東北行政委員会）を樹立、主席に林楓、副主席に張学思と高崇民が就任した。10月、通化に遼寧省政府と軍区を組織し、11月臨江に移り、国民党軍の攻撃に備え、翌47年にかけて、四回にわたる「臨江作戦」に従事、南満地区を防衛することに成功。この作戦は、陳雲、肖勁光らの指導によるものであったが、遼寧軍区の司令員としての張学思の役割も大きかったとされる。48年11月、遼瀋戦役の勝利とともに瀋陽接收に赴き、49年4月、東北行政委員会の決定によって遼東省政府主席に任命された。しかしその直後、北京での中華全国青年代表大会に参加した際、周恩来から海軍創設のメンバーに指名された。この4年間のかれの活動は、東北解放区の樹立過程そのものであり、東北行政委員会の責任者の一人として、他の人間には果たせなかった役割を担ったといえるだろう。そこには、張学良が蒋介石によって監禁状態にあったこととは対照的なまでの、中国共産党側の東北地域に対する張学思を通じた政治的指導があった。関内流亡東北人の14年間にわたる抗日復土運動の指導者たち、高崇民や車向忱、于毅夫らの活動もその一環に位置づけられていたのである。

第五期（33～54歳）は、1970年5月の死去まで。以下簡単にその略歴を記すこととする。49年9月、第一期全国政治協商會議に、中国人民解放軍総部海軍代表として参加、11月、大連海軍学校副校長（校長は肖勁光）、51年6月、周恩来の視察を受け、53年3月、朝鮮戦場を視察、8月、海軍副参謀長に就任。55年、一江山島戦役に海軍代表として参加、9月海軍少将に任ぜられ、翌56年8月、

40歳でソビエト、レニングラードのウォロシーロフ海軍学院に派遣され、58年8月、帰国。61年3月、海軍参謀長に就任、65年10月、「四清運動」に参加、66年6月以降、「文化大革命」の影響をくいとめるが、67年9月、林彪派李作鵬らに監禁され、「東北叛党投敵反革命事件」という事実無限の理由で闘争対象となり、70年2月、病状悪化、5月29日死去。75年4月8日、海軍は張学思を名誉回復、80年12月、あらためて名誉回復の報告がなされた。

〔参考文献〕

1. 劉永路・呉国良・胡序文『張学思將軍』、解放軍出版社、1985年。
2. 汪文江口述「光復後張学思同志在東北」『遼寧文史資料選輯』第10輯。

高崇民 Gao Chongmin (1891. 11. 14～1971. 7. 29)

名は健国、字が崇民。父は高葆如、東園と号し、教師をしていた。生母は郭氏、継母は蔣氏。兄弟姉妹五人。李素質との間に長男高存信、夫人の死後、王桂珊との間に四男四女。1891年、遼寧省開原県柴河溝靠山屯村に生まれ、9歳の時、親義和団であった父とともにフランス人神父とその教民に追われて、大寨子村に難を避けた。1909年、奉天省立農林学堂に入り14年卒業。その間、1911年には奉天で同盟会に参加。これ以降、高崇民の約60年にわたる個人史は四期に区分できる。

第一期（23～40歳）は、日本留学より九・一八事件で北京に流亡するまで。1914年、開原県の公費留学で日本の明治大学に入学するが、翌年「二十一カ条要求」反対運動で、一時帰国し、上海で倒袁活動に従事。1919年、卒業帰国し、北京で『正言報』の編輯者となり、22年東北に帰り、23年の「旅順・大連回収運動」で奉天省長王永江に退去命令を受く。1924年、国民党に参加、25年ハルビン東省特別区市政管理局で督学兼教科長となり、教育活動に力を入れ、28年、奉天にもどり、瀋陽工商聯合会総務長となり、苛捐雑税反対運動などを組織。30年、張学良の秘書となり奉天省農務会会長を兼ねた。この間に閻宝航、杜重遠、車向忱らと国民外交協会、国民常識促進会、遼寧省拒毒聯合会などで活動、張学良政権の3年間を特徴づける民族主義的政治活動の一端を担っていた。

第二期（40～45歳）は、「九・一八」事件後閩内に流亡し、西安事件の当事者

として平和解決を実現するまで。1931年9月25日、日本軍支配下の瀋陽を離れ北平に流亡。27日、閻、杜、盧広積、王化一、王卓然らと東北民衆抗日救国会を組織。常務委員兼総務部副部長として東北義勇軍の抗日武装闘争を支援、11月、北平や天津の流亡学生請願団の引率者として南京で国民党中央党部・蒋介石と面談、その「不抵抗政策」を批判した。33年、蒋介石は、熱河を失ったことの責任を張学良に転嫁し、部下の何応欽を北平軍分会主任に派遣、同年7月東北民衆抗日救国会に解散命令を出したが、高崇民は、9月18日、閻、陳先舟、杜超然、王化一らと秘密抗日組織「復東会」を結成し、秘書長となった。これに対し、蒋介石は、張学良がヨーロッパから帰国後、34年5月自らを名誉会長とする（会長、張学良）四維学会を漢口で組織させた。高崇民と閻宝航は当初これに参加しなかった。35年7月、国民政府の逮捕令などを避けて、上海英租界に來り、鄒韜奮、胡愈之らとの交流を深め、10月「新生事件」で獄中にあった杜重遠との会談では、蒋介石の一石二鳥（東北軍と紅軍を相闘わせともに消滅する）の策略に陥れられぬよう張学良を説得することにし、11月下旬西安で張と面談した。同時に、杜重遠を通じた楊虎城への説得もなされていた。この過程で、中共党員の宋介農（孫遠生）が高崇民に与えた影響は大きなものがあった。1936年前半期、中国政治は大きく抗日救国の方向へ転換しつつあり、張学良も4月周恩来と秘密会談を行っていたが、高崇民・栗又文・孫遠生らは3〜4月『活路』という小冊子を作成、高の分担した「抗日問答」はとくに東北軍の抗日復土闘争の重要性を訴えていた。この小冊子が東北軍や西北軍で配布されたことから国民党側に追われ、高崇民は天津に避難、そこで南漢宸の援助下にマルクス・レーニン主義や中国共産党についての理解を深めた。36年10月、張学良と楊虎城の要請で陝西に入った高崇民は、同年12月12日の西安事件では、対時局宣言の起草にかかわり、その後設計委员会主任として、中共代表団の周恩来、葉劍英や李克農とも密接なコンタクトをもった。西安事件の平和解決方針については中共の見解を支持し、また、37年2月2日の東北軍少壮派（応徳田、孫銘九、苗劍英ら）の王以哲殺害事件後、東北軍から離れ、北平に赴いた。高崇民をはじめとする閩内流亡東北人の抗日復土運動は西安事件や抗日民族統一戦線の形成過程を考えるうえできわめて重要な位置を占めていた。

第三期（46～55歳）は、抗日戦争勝利後、45年11月東北へ派遣されるまで、1937年2月末北平に赴いた高崇民は、周恩来の指示にもとづいて、栗又文、劉瀾波、李延禄、杜重遠、閻宝航、陳先舟、盧広積らとともに、東北愛国人士と救亡団体の統一戦線「東北救亡総会」（東総）の組織化をはかり、6月北平で成立大会を開催した。盧溝橋事件以後、東総の分会を山東や山西に樹立、南京では戴笠と交渉し東総の合法的許可を得、38年8月、延安に赴き毛沢東、周恩来と会談し、東北幹部支隊の設立を提言した（その後39年夏、成立、張学思が隊長となった）。この時、周恩来と陳雲に入党申請したが、東北知名人士として入党せずに活動したほうがよいとの判断がなされた。41年9月、重慶に移っていた東総の責任者となり、『反攻半月刊』を創刊（この編輯では、エスペランティストの緑川英子〔長谷川照子〕とも交流があった）、蒋介石や戴笠の監視下、1945年9月まで5年間、閩内東北人の抗日復土運動のセンターとしての役割を果たした。41年以降、重慶における民主憲政運動に参加、「三民主義革命同志会」（国民党左派）や中国民主同盟のメンバーとなった。また、44年秘密裡に「東北民主政治協会」を閩や陳先舟らと組織した。これは戦後の東北地域政治の再編成に大きな役割を果たした。

第四期（55～58歳）は、49年9月中国人民政治協商会議に出席し、中央人民政府委員に選出されるまで。1945年11月、東北解放区の安東省主席に任じられ、重慶から上海、北平などを経て、46年3月撫順で、彭真、林彪、林楓、呂正操、張学思、鄒大鵬らと会見後、安東で省主席となった。7月、張学思と劉瀾波の紹介で中国共産党に入党（高存信作成の年譜では、10月となっている）。8月、ハルビンでの東北各省市代表聯席会議で、張学思とともに東北行政委員会副主席となり、東北解放区全体の責任をも負うこととなった。1949年8月、瀋陽で東北人民政府副主席に就任、東北人民政府司法部長、最高人民法院東北分院長を兼ねた。この間、中共東北局社会部の指導下に、国民党・国民政府支配下の東北軍工作や、馬占山、傅作義への働きかけをおこなった。高崇民は、民族主義者として出発しつつ、抗日期の14年間をくぐるなかで、1946年、東北に共産主義者として帰ってきた。この思想的実戦的軌跡は、閩内流亡東北人の一つの典型であったといえよう。

第五期（58～80歳）は、中華人民共和国成立後、文革による迫害のなかで1971年獄中で死去するまで。1949年10月1日の開国大典に参加、54年8月、東北から中央に異動、9月の第一次全国代表大会の主席団メンバーとなり、全人代常務委員会として1965年まで活動。65年8月にはチベット自治区成立記念に、政府代表団員として参加。また、1965年第4期全国政治協商会議副主席や、民主同盟中央委員会副主席の地位にもあった。文革後、1967年になって、康生らが「東北幫叛党投敵反革命集団」と称する、1946年2月の張学良釈放要求に署名した中共黨員、東北軍、愛国人士90余名を「叛党分子」として摘発する事件がおこった。この「東北叛党集団」は「呂正操や張学思が東北独立王国樹立を企図し、張学良を復活させようとするもの」であったとされた。これに連座させられて高崇民は68年10月8日秦城監獄に捕らえられそのまま、71年7月29日死去した。

1979年4月20日、高崇民は中共中央の批准を得て正式に名誉回復を受け、80年5月、中共中央組織部は「東北叛党集団」事件をデッチあげ事件として名誉回復した。これらの人物には、呂正操、劉瀾波、張学思、閻宝航、于毅夫らが含まれていた。

〔参考文献〕

1. 何世芬・張今芳・高存誠・李致平「高崇民」『中共党史人物伝』、第19巻、中共党史人物研究会編、陝西人民出版社、1985年。
2. 閻宝航「流亡閩内東北民衆敵抗日復土闘争」『文史料資料選輯』、第6輯、中華書局、1960年。
3. 何平・方誠「從愛国民主志士到堅強的共產党人」『吉林大学社会科学学報』、1982年第4期。
4. 『遼寧文史資料第13輯、高崇民遺詩專輯』、遼寧人民出版社、1986年。
5. 李延緑・栗又文・孫漢超「可使寸寸折、不做繞指柔」『人民日報』、1979年3月27日。

杜重遠 Du Zhongyuan (1898～1944. 6.)

吉林省懷德県楊大城子に生まれ、父は杜輝、母は董氏、兄は杜勤学。生没年は、参考文献の2. による。1913年、15歳の時に奉天省立両級師範附属中学入学、この

間に、「二十一カ条要求」反対運動にも参加。1917年、公費による日本留学生として東京高等工業学校窯業科に入学、23年帰国。柳条湖事件（九・一八）以後、関内流亡東北人のジャーナリストとして抗日救亡運動を指導。

第一期（～1931年）は、柳条湖事件で関内に流亡する1931年末頃まで。奉天の中学在学中、すでに「二十一カ条」反対運動に加わり、日本留学中には、1923年春の「旅順・大連回収」運動の一翼を担い、北京や天津などへ宣伝隊を率い活動した。同時に、窯業を学んだことによって、「実業救国」的思想を抱き、23年の帰国後は、瀋陽城北小二台子に肇新窯業公司を設立、1000余人の労働者を擁する機械製陶工場にまで発展させた。1927年、奉天省総商会副会長に選出され、同年秋にかけての日本の臨江領事館開設に抗議のデモを組織、日本商品ボイコット運動を展開した。張学良が東北政権を担ってからは、高崇民や閻宝航らとともに事実上のブレインとして働き、1929年、国民外交協会を総商会内に設立、対日外交交渉に際しての民族主義的支持団体とした。30年の上海での全国国産品展覧会では、国産化と日本商品ボイコットを積極的に訴えた。

第二期（1931～38年）は、抗日救亡運動の指導者として全国的活動を展開した時期で、39年はじめ、新疆に移るまで。九・一八事件後、9月27日、関内に流亡した閻宝航や金哲忱、盧広積らは高崇民、王化一らと東北民衆抗日救国会を結成した。杜重遠は当時まだ北平に来ていなかったが、同会の常務委員兼政治部副部長に選出された。31年11月の日本軍の黒龍江攻撃に抵抗した馬占山への上海における支援活動や、32年1月28日の上海十九路軍の抗戦支援を積極的に推進した。33年初の熱河抗戦にも参加したが、蒋介石の不抵抗政策の限界を痛感し、以後、上海を中心に抗日救亡宣伝に力を集中するとともに、九江に光大瓷業公司を創業、同時に景德鎮で江西省陶業管理局長の任につき、管理局の創設した訓練所は事実上抗日愛国青年の訓練機関になっていた。1933年から35年にかけて、上海と江西をゆききしながら、『生活周刊』誌を発行していた鄧韜奮らと交わり、抗日救亡運動に従事し、沈鈞儒、沈雁冰（茅盾）、史良、胡愈之、沙千里、李公樸らをはじめ、中共地下党員の宋介農（孫達生）とも密接な関連をもっていた。33年12月、『生活周刊』誌が、福建人民政府を支持したことを口実にして国民政府によって廃刊させられたあと、34年2月、杜重遠は『新生周刊』誌を発刊、「民族の生存」

のために奮闘すると宣言した。ところが、35年5月4日、同誌2巻15期に易水というペンネームで編輯者の一人艾寒松が「閑話皇帝」と題する短文を掲載し、その一文に日本の天皇裕仁が生物学者であればもっと成果があがったであろうという文言が含まれていた。これを「天皇侮辱、国交妨害である」として、日本軍部の圧力を受けた駐上海総領事石射猪太郎は上海市政府と国民政府に抗議し、『新生周刊』誌閉鎖と主編の杜重遠の処罰を要求した。同じ文章のなかで言及されていたイギリス皇帝については、イギリス側は何の反応も示さなかった。日本側の強力な圧力のなかで、6月24日、上海市公安局は「刑法」に触れるとして杜重遠を起訴し、7月、江蘇高等法院第二分院は「懲役1年2ヵ月」の判決を言い渡した。これを「新生事件」という。上海はもとより、香港、シンガポールなどでも国民党、国民政府の対応を非難抗議する運動が広がった。杜重遠はこの判決の不当性を全国に訴えつつ、上海の漕河涇監獄に入ったが、全国の世論や、監獄を主管していた蔡勁軍がかれの旧友であったことも有利に作用し、事実上、監獄への訪問や差し入れが自由な状態となり、東北軍幹部や流亡東北人の抗日救亡運動指導者高崇民らを、中共党員の胡愈之や宋介農に紹介したり、36年8月、たまたま虹橋療養院でいっしょになった楊虎城と抗日救国、西北大連合（三位一体）について論じあい、すでに密接な連絡のあった張学良や紅軍との連合を訴えた。9月8日、満期出獄となるが、10月には西安の王曲軍官訓練団で聯共抗日の重要性を講演した。西安事件当時、景德鎮にいたかれは、国民党当局によって拘束され、平和解決後に釈放された。西安事件の策謀者とみられていたのである。37年4月、上海で樹立を決議された東北救亡總會（東総）に出席し、6月の北平での成立会議で高崇民、閻宝航らとともに常務委員に選出された。七・七事件後、9月には馬占山支援に赴き、38年6月には国民参政会参政員に選ばれた。こうした経歴からみると杜重遠は、西北大連合、西安事件を準備するうえで無視しえない重要な位置を占めていたといえよう。

第三期（1939～42年）は、新疆での活動期。1939年初、周恩来の同意のもとに、新疆を抗日根拠地の一つとして、とくにソビエトとの連携をつけるべく、中共党員の陳潭秋、毛沢民らとともに新疆迪化（ウルムチ）に入った。当時、盛世才が反帝親ソ、民族平等などの六大政策をかかげていたことや、杜重遠と同じ東北の

遼寧開原県出身で留日時代に面識があったことで、かれは新疆を抗日根拠地にしようと判断していた。新疆学院院長に就いたかれは、茅盾、張仲実、薩空了、趙丹、高滔らを教授として招き積極的に抗日救亡教育を実施した。ところが、こうした活動に脅威を感じた盛世才は、1941年5月18日、杜重遠を「汪精衛系の漢奸」として投獄。それは、同年6月の独ソ戦開始を機に反ソ反共政策に転換したことと関連しあっていた。中共八路軍駐新疆弁事処の陳譚秋、毛沢民らも逮捕され1943年9月に殺されていた。全国からの、多くの救出の努力にもかかわらず、44年6月頃、杜重遠は毒殺されたといわれる。46歳であった。

〔参考文献〕

1. 于毅夫・閔夢覚「杜重遠烈士事略」『西安事変資料』第二輯、人民出版社、1981年。
2. 里程「杜重遠東北抗日救亡運動的堅強戦士」『東北師大学報』1983年第6期。
3. 徐建東「西安事変前後の杜重遠」『社会科学輯刊』（瀋陽）、1988年第3期。
4. 杜毅「我的爸爸杜重遠」『文滙報』1979年12月12日。
5. 閻宝航「流亡閩内東北民衆の抗日復土闘争」『文史資料選輯』第6輯、中華書局、1960年。

郭松齡 Guo Songling (1883~1925. 12. 25)

字、茂宸。原籍は山西省汾陽県。曾祖父の代に本溪一帯に入境したという。1883年、盛京（現、瀋陽）東郊（現、東陵區）の漁樵寨村に生まれ、父は郭復興、字は恢原。東北出身の軍人として護法運動にも参加し、最後は1925年12月張作霖打倒に立ち上がり敗死するにいった。郭松齡の生涯は三期に区分できる。

第一期（～35歳）は、護法運動の失敗後、1918年秋奉天に帰るまで。家が貧困であったため雇工として働く生活をし、ようやく18才になって奉天の書院に学んだ。日露戦争時の中国の惨状をみて、軍人としての道を選び、1906年奉天陸軍速成学堂に入学、翌年には北洋陸軍第三鎮に派遣された。帰奉後、盛京將軍衙門衛隊に配属されたが、陸軍統領朱慶瀾に認められ、1909年、朱慶瀾の四川移動とと

もに成都に駐防した。1911年武昌起義後、四川でも呼応し、郭松齡もこれに参加し、朱慶瀾らを擁して四川軍政府を擁立。しかし、11年末内紛によって追われ、奉天に帰り、革命派の聯合急進会の指導者、張榕と直接連絡をとったが、総督趙爾巽や奉天前路巡防宮統領張作霖によって弾圧された。1912年北京将校研究所に入学、いったん帰奉後、さらに派遣されて13年から16年にかけて北京の中国陸軍大学に在学し、卒業後、北京講武堂の教官となるが、袁世凱死後の政治的混乱のなかで、17年8月の孫中山による広州での非常国会開催、護法運動に共鳴し、広東省長となっていた朱慶瀾を通じて粵贛湘辺防督弁公署の参謀や広東省警営軍営長を歴任した。ところが、18年5月広州軍政府に依る軍閥によって孫中山は大元帥を辞任させられた。郭松齡も同年末、奉天に帰った。その時、かれは「奉天軍閥の巢窟に身を投じ、密かに兵権をとり、潜勢力を蓄え、根本的改造を謀らん」と決意したという。

第二期（35～42歳）は、張作霖打倒の軍をおこすまで。帰奉してから、中国陸軍大学の同期であった奉天督軍署参謀長秦華の推薦で督軍署中校参謀となり、1919年2月には東三省陸軍講武堂の戦術教官に就任し、炮兵科に入ってきた張学良と面識をもち、翌20年春、張学良が巡閱使署衛隊旅長に就くとともに、その参謀長兼第二団長となった。事実上、張学良を指導する立場となった。1920年7月、安徽派と直隸派の戦争が勃発し、調停の名目で入関、天津で安徽派軍を敗り、張作霖の信任を得るようになった。22年4月の第1次奉直戦争で張作霖は敗北し、東三省独立を宣言したが、奉天軍内では日本陸軍士官学校卒業生（士官派）の楊宇霆や姜登選らが張作霖の入関作戦を支持し、総参議楊宇霆は東三省兵工廠督弁を兼ねた。奉天派は総兵力25万を擁するにいたった。郭松齡は「保境安民」「改良内政」を唱え、張作霖にその実施を求めたが楊宇霆派によって阻止された。1924年9月の第二次奉直戦争では、楊宇霆が、総参謀長となり15万の兵を入関させた。その時、馮玉祥の反直隸派クーデタにより、直隸派は敗北し、奉天派の勝利となった。時あたかも、25年に入り、上海を中心とする巨大な労働運動（五・三〇運動）がおこり、国民革命の波が高揚しつつあった。にもかかわらず、張作霖は、25年5月から9月にかけて江南一帯を占領させた。郭松齡はこれに反対し、東北の「保境安民」を主張したが容れられず、10月6日日本に身を避けた。日本において、

馮玉祥との合作による張作霖打倒を密かに決意し、10月24日、奉天に帰り、張学良の委託により天津に第三方面軍司令部を設置、7万人を擁し、国民軍と対峙したが、11月にかけて張作霖の攻撃命令を拒否、張学良には「東北政局の改造」を訴えた。11月19日、天津国民飯店で「反奉の挙兵」を決定、馮玉祥との合作を実行、11月22日、瀋州で東北国民軍と改称、「反奉通電」を発した。

第三期（42歳）は、日本軍の介入により敗北、死刑に処せられるまで。11月23日、瀋州を出発、12月4日～5日にかけての連山における大勝は、張作霖の敗勢を決定づけ、張下野の準備すらおこなわれ、奉天派軍内にも大きな動揺を生み、郭松齡軍側への移行がはじまった。ところが、12月15日、日本政府は関東軍司令官を通じて郭・張両軍に、満鉄付属地両側12キロ以内の戦闘行為を禁止するという警告を発した。これは事実上、遼河を越えて奉天に向かいつつある郭軍の進攻を阻止する役割を果たした。12月21日、郭軍は巨流河東岸の張作霖軍に総攻撃をかけたが、23日にかけて劣勢となり郭夫妻らは24日新民県で逮捕され、25日遼中県に護送の後、処刑された。翌26年1月4日には、中国留日学生総会は東京で郭松齡夫妻追悼大会を開催、1月27日、北京各界も「北京国民・日本軍東北派兵反対大会」を開催、郭松齡を追悼し、馮玉祥らも花輪を送った。李大釗は、郭松齡のことを「反奉戦争、すなわち日本帝国主義反対戦争における勇敢な戦士」と述べた。

〔参考文献〕

1. 『遼寧文史資料』第16輯、「郭松齡反奉」、遼寧人民出版社、1986年。
2. 任松・武育文『郭松齡將軍』、遼寧人民出版社、1985年。
3. 毛履平・王関興「論郭松齡事變的性質及其失敗的原因」『學術月刊』1982年5月。
4. 杜尚俠「試談郭松齡反奉的性質」『東北地方史研究』1985年第3期。
5. 江口圭一「郭松齡事件と日本帝国主義」『日本帝国主義史論』第3章、青木書店、1975年。
6. 土田哲夫「郭松齡事件と国民革命」『近きに在りて』第4号、1983年。

楊宇霆 Yang Yuting (1885. 8. 29～1929. 1. 10)

原名、玉亭。号、凌閣、のち隣葛。原籍、河北省灤県戴家嶺。祖父、楊正栄は同治年間、凶年のため法庫県蛇山溝村に移住。楊正栄の四男永昌が楊宇霆の父。奉天軍閥張作霖の参謀として関内進出路線を推進するが、1929年、張学良によって暗殺された軍人政治家。かれの政治生活は三期に区分できる。

第一期（～39歳）は、1924年、第2次奉直戦争前夜まで。楊宇霆は、1904年の最後の科举を受け、秀才となった。1909年6月、東三省総督趙爾巽のもとで、政府留学生に選ばれ日本陸軍士官学校第八期砲兵科に入学、11年5月帰国後、吉林の第二十三鎮孟恩遠の部隊に配属された。辛亥革命後、1913年東三省都督府軍械科長兼軍械廠長となったが、1916年4月、張作霖が奉天督軍兼省長となったとき、陸軍第27師の参謀処長に抜擢され、張作霖の直系部隊を訓練しなおすことに成功した。1917年、北京政府陸軍次長をしていた徐樹錚と関係をつけ、北京政府をめぐる安徽派支持の側にまわる立場を明確にした。張作霖が中央政治に進出する政治的基礎をつくったといえる。しかし、18年には、密かに洛陽などで自己の部隊創設と訓練をおこなったため、張作霖から解任され、北京や天津で交通系の梁士詒などと交流していた。1920年7月の安直戦争後、21年3月張作霖は楊宇霆を奉天によびもどし、東三省巡閱使署の総参議に任じ、中央政治にかかわれる人物として直隸派攻撃の策定に参与させた。22年4月の第一次奉直戦争では参謀長として参戦したが敗北した。楊はこの敗北原因を軍隊の弱体にあるとして、陸軍整理処を設置し再編成と再訓練を実施、約25万人体制の部隊をつくりあげた。また、海軍や航空隊を創設し兵工廠も拡充した。この過程で、楊宇霆は姜登選、韓麟春、于珍らを日本の陸軍士官学校のグループ（士官派）としてとりたてたのに対し、郭松齡は中国陸軍大学や保定軍官学校のグループ（陸大派）を形成、張学良もこの影響下にあった。当時、奉天軍内には士官派と陸大派（この二派を新派という）、そして張作霖の旧部下のグループ（旧派）の三大勢力が対抗しあっていた。楊宇霆は、張作霖を擁して北京政府掌握のための作戦を展開していた。奉天政界では「小諸葛」と呼ばれていた。

第二期（39～43歳）は、1928年、張作霖が爆殺されるまで。1924年9月、第二次奉直戦争でも参謀長に就き、15万の軍を入関させたが、50日余も決着がつかない

かった。しかし、馮玉祥軍のクーデタ（北京政変）を機に、直隸派に勝利し、直隸、山東、江蘇、安徽が支配下に入り、その論功行賞で楊宇霆は江蘇督弁となった。奉天系軍閥が江南を支配したことに対し、広範な反奉運動をはじめ、地元の軍閥の反抗もあって、25年11月、楊宇霆は奉天に逃げかえった。こうした事態にもかかわらず、張作霖はなお楊を重用しつづけたが、これに対し郭松齢らは、関内進出路線ではなく「保境安民」を実現するべく「君側の奸」をとりのぞくというスローガンで反奉通電を発した。楊宇霆は当初、大連に身を避けたが、張作霖の要請で「討逆軍」を組織し、日本側の後援政策とあいまって郭松齢の「反乱」を同年末に鎮圧した。1926年に入ると、南方の国民革命運動が高揚し、反帝反軍閥闘争は本格的な北伐戦争へと発展した。これに対抗するべく、12月張作霖は「安国軍」を組織し、27年6月北京に「安国軍政府」を樹立した。この過程で楊宇霆は主導的役割を演じ、28年6月の張作霖爆殺と張学良の帰奉時には軍権を掌握していたとされる。

第三期（43歳）は、1929年、張学良によって暗殺されるまで。張学良が奉天に帰り、父の後を襲って東三省地域の政治的指導者となった頃、楊宇霆は関内の東北軍をまとめて、9月奉天に帰還した。しかし、張学良の南京国民政府との合流政策には反対し、28年12月29日の「易幟」に際し、国民政府から任命された東北政務委員の職には就かなかった。張学良からみれば、あきらかに自己の政策に反対する勢力の代表者であった。29年1月10日夜10時頃、楊宇霆とその腹心であった黒龍江省長常蔭槐は、張学良の指示によって暗殺された。

〔参考文献〕

1. 『遼寧文史資料』第15輯、「張学良與楊常事件」、遼寧人民出版社、1986年。
2. 常城「略論東北『易幟』與『槍斃楊常』」『社会科学戦線』1982年第3期。
3. 常城「奉系軍閥の“智囊”楊宇霆」『社会科学戦線』1984年第1期。
4. 潘喜廷「楊宇霆其人其事」『東北地方史研究』1986年第1期。

〔註記〕

人物伝記の資料として、復旦大学歴史系資料室編『辛亥以来人物伝記資料索引』上海辞書出版社、1990年、が1万8千人の伝記文献を掲載している。本稿作成にあたり利用したことを付記する。